

展覧会について

森本太郎の卒業制作の作品名は、《サンプリングによるオブジェクト》であった。これは「オブジェクト＝物」をコピー機のモザイク機能を用いて表現した、というか機械に委ねられて表現されたもので、そこには作家の主観は排除されている。その主観はただ作品として選択され、提示されるときにのみ現れる。いずれにせよ、デュシャン的態度で作り出され、モザイク処理され断片化されたそれらはピカソやブラックによる分析的キュビズムの表現に通じるものがあつた。ただ彼らが絵画上の問題、すなわち造形とフォルムの探求からそこに向かったのとは異なり、森本は意識してか、無意識かは判然としないが、より感覚的に作品化していく。それゆえ、あるいはそれだからこそ、記号学的意味が付与されて立ち現われてくるのだろう。

さて、「サンプリングによるオブジェクト」の考え方は、当然ながら卒業後始めた絵画制作にも表れている。もちろん、小さな面が集積されて表されるモザイク表現を踏襲するのではなく、面は広がり、オブジェクトはあいまいになり、抽象化され始めた。しかし、これは絵画の特性を生かすことは何かを推し進めるなかでのものと思われ、ほどなくグラフィカルな感覚を残しつつ、修辭に満ちたミメーティックな表現が現れてくるが、決して作家の内的世界が押し付けられることはない。それは、自らを含めて、世界を等価に、そして等質に見ているからかもしれない。

岡村 多佳夫（おかむら・たかお）／美術評論家